

日本語語彙学習ストラテジー研究の動向と課題

天野, 裕子

<https://doi.org/10.15017/1470209>

出版情報 : 地球社会統合科学研究. 1, pp.1-8, 2014-09-10. Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

日本語語彙学習ストラテジー研究の動向と課題

アマノ ユウコ
天野 裕子

1. はじめに

第二言語の学習において、語彙習得が重要な役割を果たすことは教師、学習者ともに認めるものである(谷口ら 1994)が、授業内の限られた時間で十分な語彙を教師が全て教授することは不可能であるので、学習者は自ら語彙をわがものにする力を身に付ける必要があるという(日本語教育辞典 1982: 281)。そのため、外国語学習に携わる者は、語彙をどのように教えればよいかということのみならず、学習者がどのように学んでいけばよいのかという点についても検討していかなければならない。語彙をどのように学ぶのかを明らかにするための研究の1つに「語彙学習ストラテジー」研究がある。

Nation (2001) によれば、語彙学習ストラテジーとは以下の4つの条件を満たすものである。(Nation 2001: 217 筆者訳)

- ①選択ができる(複数のストラテジーの中から選べる)
- ②複雑である(複数の学習段階がある)
- ③トレーニングによって、知識が増え、利益が得られる
- ④語彙の学習と使用の効率が高まる

このような条件を満たす様々なストラテジーが存在することが明らかになっている(Oxford 1994, Gu and Johnson 1996, Nation 2001, Schmitt 1997)が、「語彙に関する学習ストラテジーに特化した研究の方は、あまり多くの研究がなされてきているとは言い難い状況」(田中 2006)であり、日本語学習者を対象にした研究は特に少ない(中西 2008, 橋本 2007, 横須賀 1995, Mori 2010, 王 2007, 于 2010)。

また、英語学習者のストラテジー使用の研究によれば、優れた学習者は幅広くストラテジーを使用しているが、多くの学習者はストラテジーの一部しか使用できていないことが明らかになっている(Gu and Johnson 1996, Sanaoui 1995)。このことから、Nation (2001: 229) は語彙学習ストラテジーのトレーニングを行うことは、第二言語の語彙の発達に対して非常に有効であるだろうと述べている。語彙学習ストラテジーの使用の研究は、教師がトレーニングを行う際に、数多く存在するストラテ

ジーの中から、焦点を当てるべきストラテジーを選択する上でも欠かせないものであろう。

そこで、本稿では日本語を外国語として学ぶ学習者を対象にした語彙学習ストラテジーについての研究を概観し、現在までの動向と課題について考察する。

2. 語彙学習ストラテジーの分類

1980年代以降、多くの研究者によって学習ストラテジーの分類が試みられてきたが、最も参考にされている分類の1つがOxford (Oxford 1994) によるものである。語彙学習ストラテジー研究にも、この分類を参考にした研究が見られるため、本稿でもその分類を紹介する。

Oxfordの分類は、学習ストラテジーが直接ストラテジーと間接ストラテジーという大きな2つのカテゴリーに分かれている。直接ストラテジーとは「目標言語に直接かかわる言語学習ストラテジー」のことであり、①記憶ストラテジー、②認知ストラテジー、③補償ストラテジーという3つの下位カテゴリーを持つ。「記憶ストラテジー」は「一定の機能を持ち、新しい情報の蓄積と想起を助ける」もの、「認知ストラテジー」は「学習者がいろいろな方法を使って、外国語を理解し、発話するのに役立つ」もの、「補償ストラテジー」は「言語使用にあたって、知識のズレを埋める目的で使われる」ものである(Oxford 1994: 37)。間接ストラテジーは言語学習を支えるもので、多くの場合は目標言語に直接関係しないものである。間接ストラテジーは①メタ認知ストラテジー、②情意ストラテジー、③社会的ストラテジーという3つの下位カテゴリーを持つ。「メタ認知ストラテジー」は「学習者が自ら学習の位置づけ、順序立て、計画、評価といった機能を使って、言語学習の過程を調整する」もの、「情意ストラテジー」は「感情、動機づけ、態度を調整するのに役立つ」もの、「社会的ストラテジー」は「学習者が他の学習者とのコミュニケーションをとって学習していくのを助けるもの」である(Oxford 1994: 114)。これら6つの下位カテゴリー

にはそれぞれ2~4つの戦略のカテゴリーがある。オックスフォードのこれらの分類を基にした調査紙をStrategy Inventory for Language Learning (SILL) といい、学習戦略だけでなく、語彙学習戦略の調査においても、使用されている。

Schmitt (1997) は、オックスフォード (1994) の言語学習システムに基づき、広範囲の語彙学習戦略の分類法を開発した。Schmittはオックスフォードの6つのカテゴリーの中から、①社会的戦略 (SOC)、②記憶戦略 (MEM)、③認知戦略 (COG)、④メタ認知戦略 (MET) の4つを取り入れ、そこに新たに語彙学習戦略特有のカテゴリーを付け加えた。それは、新出語彙の意味を見つける際に他人の力を使わずに、個々がどのような種類の戦略を使用したのかを記述するもので「決定戦略 (DET)」と名付けられている。

Gu and Johnson (1996) は大規模なリストを作成しているが、それらのカテゴリーは「語彙学習に関するピリーフ」と「語彙学習に関する戦略」の大きく2つに分けられる。また「語彙学習に関する戦略」は①メタ認知規則②推測戦略③辞書戦略④ノートテイキング戦略⑤記憶戦略 (リハーサル) ⑥記憶戦略 (エンコーディング) ⑦活性化の戦略の7つに分類され、全ての下位カテゴリー内には、それぞれ3~8つの戦略がある。

一方、Nation (2001) は語彙知識の側面や学習段階を考慮した分類法を開発している。(表1)。戦略は大まかに「プランニング」、「情報源」、「処理過程」の3つに分類される。「プランニング」は何に、いつ、どのように注意を払うかを決めることで、「語彙を選ぶこと (学習目標に合う頻度や専門性のレベルの語彙を選ぶ)」、

「焦点を当てる語彙知識の側面を選ぶこと (意味、形の変化、コロケーションなど)」、「戦略を選ぶこと」、「繰り返しのプランニング」の4つのタイプがある。「情報源」は新出語彙を学習するためにその語彙に関する情報を入手することで、「語彙の分析 (接辞と語幹など)」、「文脈の使用」、「母語、または第二言語の参考資料にあたること (公的なもの、より自然発生的な情報源)」、「母語、または第二言語との類義語の使用」がある。「処理過程」は語彙を覚える方法と覚えた語彙を使えるようにするための方法に関するもので、「気づき (語彙を学習すべき項目と見なすこと。カードの使用、繰り返しなど)」、「想起 (記憶の再生)」、「生成」の3つがある。

以上のように、語彙学習戦略の分類は研究者によって、どこまでを範囲とするのか、ある戦略をどのカテゴリーに分類するのか、見解が分かれている。そのため、先行研究を参照する際にも、どの分類を参考にしているのかを念頭に置く必要がある。

3. 語彙学習戦略調査の手法

語彙学習戦略には様々な性質のものがあるので、調査の目的によって調査手法を検討しなければならない。調査手法には主に心理学の調査手法である①質問紙調査、②観察法、③インタビュー、④ダイアリーあるいはジャーナル、の4つがある。

質問紙調査には様々なタイプがあるが、語彙学習戦略でよく使用されるのは評定法である。評定法とは質問項目に対して「よくあてはまる」「全然あてはまらない」など複数の段階のうち、最も適切なものを選択させる調査用紙である。長所としては多くの学習者のデータを少ない労力で得ることが可能で、統計処理も容易であることがある。また、廣森ら (2005: 160) は「学習

表1 Nationの語彙学習戦略の分類 (Nation 2001: 218より抜粋 筆者訳)

戦略の一般分類	戦略のタイプ
プランニング: 何に、いつ注意を払うか	語彙を選ぶこと
	焦点を当てる語彙知識の側面を選ぶこと
	戦略を選ぶこと
	繰り返しのプランニング
情報源: 語彙に関する情報を見つけること	語彙の分析
	文脈の使用
	母語、または第二言語の参考資料にあたること
	母語、または第二言語との類義語の使用
処理過程: 語彙知識の確立	気づき
	想起
	生成

ストラテジーというものに対してあまり予備知識を持たない学習者に対して、自らのストラテジー使用を振り返り報告させることは難しい」と述べており、そのような学習者に対しては予めストラテジーを提示できるこの手法を使用すれば、様々なストラテジーについての報告を得られる。しかし、反対に学習者がそのようなストラテジーを使用していないにも関わらず、質問項目を見ている内に使っている気になって回答をしてしまうこともある(村井 2012 : 49-79)。また、「よく使用している」と学習者が答えていても、本当に使用しているのか、どの程度使用しているのか確認する方法はない。

観察法では、研究者が実際に見えるストラテジーを記録するので、客観的なデータが得られる。多くのストラテジーが目に見えず、この方法によって記録できるストラテジーは限定的ではあるものの、学習者の報告を通さず直接データが得られるという利点は大きい。

インタビューでは、観察からは分からない情報を得られ、質問紙とは違って、学習者の様子を観察しながら柔軟な対応ができる。しかし、手間と時間がかかる上、学習者の記憶に頼るものであるし、学習者の言語能力のレベルによっては、十分な情報が得られない(村井 : 115-116)。

ダイアリー、あるいはジャーナルは、「一般的な言語学習体験を通じて学習者が使った学習ストラテジーの内容や、その感想・評価について、一定の期間、自由に記録していく(廣森ら 2005 : 168)」ものである。学習者の記憶に頼る、学習プロセスの全てが記載されるわけではないといった欠点があるものの、学習ストラテジーの種類や、特に変化のデータを得たい場合には有効な手法である。

4. 日本語学習者の語彙学習ストラテジー

4. 1 語彙の知識と語彙学習ストラテジー

横須賀(1995)は、学習者が使用しているストラテジーと語彙学習において有効なストラテジーを明らかにすることを試みた。オーストラリアの学習歴2年の日本語学習者10人を対象に予習、授業、復習、単語クイズという段階に分けて調査を行い、予習と授業後に調査テスト1、復習後に調査テスト2を行い、それらの結果から10人中上位3人と下位3人の使用傾向の違いが見られないかを調べた。使用する語彙学習ストラテジーのデータは、ダイアリー・スタディー(予習)、観察法とインタビュー(授業)、インタビュー(復習)と様々な手法を組み合わせで収集している。また、収集したストラテジーはオックスフォードの分類に従って、分類している。その結果、予習段階

で上位者は認知作業(ある語彙を知らないものだと確認する)を効率よくこなし、学習していない語彙については次の学習段階で解決しようとする心理的余裕を持ち、次段階への問題意識を持つためのストラテジーを効果的に使用していた(例:授業で質問するためにマーカーなどで印をつけておく)。一方、下位者は認知作業の効率が悪く、未習語彙の翻訳の多さや全てを解決しようとする気負いから、学習に対して心理的な悪影響が見られた。授業段階では上位者は能動的に問題意識を持って単語を認知すること、社会・文化的な文脈を想起し、語以上のレベルで単語を認識して推測すること、次段階のために積極的に準備することを行っていた。最後に復習段階であるが、ここでは成績の区別なく、繰り返し練習することが最も有効なストラテジーであると横須賀は述べている。

この研究では語彙学習ストラテジーを学習段階ごとに明らかにする試みがされている点が画期的である。ただし、注意すべきなのは、横須賀のいう「学習段階」はNation(2001)の学習段階とは異なるものであるということだ。Nationの学習段階が第二言語の語彙全体の学習段階を指しているのに対し、横須賀の学習段階とはある特定のユニットでの限定された語彙の学習段階を指す。また、複数の研究手法を組み合わせることで広くストラテジーのデータを収集しているが、そのデータは限定的で、直接研究者が見て確認できるストラテジーに偏っている。更に、レベルについての言及がない上、対象者は日本滞在歴が3週間~4年半と一定しておらず、4年半の対象者はJSL環境での日本語学習歴もある。そのため、上位者と下位者との差異には学習環境の影響があることも考えられる。

橋本(2007)も、学習者の使用する語彙学習ストラテジーと語彙知識との関連を明らかにしようとした。調査では、初級のハンガリーの大学生23人を対象にGu and Johnson(1996)のアンケート調査(評定法)と受容語彙と産出語彙を測る語彙テストの2種類を作成して調査を行った。受容語彙のテストについてはNation(1990, 2001)のVocabulary Levels Test、産出語彙のテストについてはProductive Levels Testの形式を用いており、語彙のレベルは旧日本語能力試験の4級である。その結果、受容語彙と産出語彙との知識に共通して関連している傾向として「記憶ストラテジー(エンコーディング)」のうち、「文脈的なエンコーディング」は、受容を図る語彙テスト($r=.41$)とも産出を図る語彙テスト($r=.46$)とも正の相関が示された。一方、産出のみに見られた傾向として「活性化のストラテジー」と産出を図る語彙テストに正の相関が見られた($r=.53$)。橋本(2007)のよ

うに、日本語学習者を対象にアンケート調査と語彙テストを行った研究は少なく、更に語彙知識を受容語彙と発表語彙に分けて双方との関連を調査した研究は他にはない。また、Gu and Johnsonの調査用紙は非常に詳細であるため、先行研究の中で最も多くのストラテジーの種類データを得ている。

王 (2007) は、中国の大学の日本語非専攻の大学生47人を対象に、O' Malley and Chamot (1990) の分類を元にしたアンケート調査と語彙テストを行い、語彙知識と語彙学習ストラテジーの相関関係を調査している。語彙テストは日本語の音を示し、対応する中国語か、日本語の同義語を書く形式であるが、レベルについて正確な記述が見られなかった。「連語で記憶する ($r=.320$)」「日本語を実際に使うことで語彙を覚える ($r=.310$)」「英語の発音から日本語の外来語の意味を推測する ($r=.300$)」という3つの認知ストラテジーと語彙テストに有意な正の相関が示された。更に、これらの語彙テストの得点の上から25%を上位群、下から25%を下位群とし、t検定を用いてこれら2つのグループに有意な差があるかを求めた。その結果、「間違いを正す ($p=0.028<0.05$, $t=2.345$)」「連語で記憶する ($p=0.042<0.05$, $t=2.159$)」「文脈から語の意味を推測する ($p=0.039<0.05$, $t=2.200$)」「辞書で単語の発音、意味、用法を調べる ($p=0.021<0.05$, $t=2.493$)」「日本語を実際に使うことで語彙を覚える ($p=0.025<0.05$, $t=2.414$)」に有意な差があることが明らかになった。つまり、この結果は、語彙テストの成績がよい学習者は、文を注意深く読んで語彙を推測し、間違えた際はきちんと訂正し、辞書を引いており、反対に語彙テストの成績が悪い学習者はこれらのストラテジーをよく使用していないことを示唆している。

また、王は日本語専攻の学生と非専攻の学生が使用する語彙学習ストラテジーの比較も行っている。その結果、「機械的に暗記する」以外の全てのストラテジーの使用が、日本語専攻の学生は非専攻の学生よりも高かった。また、ストラテジーの使用が高い順に並べると、2つのグループには大きな差は見られなかった。このように対象者が日本語専攻であるかどうかで使用する語彙学習ストラテジーの比較を行い、日本語を学習する中国語話者の語彙知識と使用する語彙学習ストラテジーとの関連性を明らかにした研究は王のみである。ただし、この研究でもレベルについて言及していない。

4. 2 日本語のレベルと語彙学習ストラテジー

Mori (2010) の研究は語彙・漢字・文法の3つの学習ストラテジーについてのものである。Moriは、アメリカの大学で日本語を2年学ぶ大学生13人を対象にメール

とインタビューを用いてストラテジーの調査をした。メールではどの位の時間、どこで、だれと、どんなタスクを、どのように学習したのかを回答させた。その後、インタビューとフォローアップメールを行い、確認作業を行っている。またそれらと学校内での中間テストの結果による分類から上位群と下位群に使用するストラテジーや使用時間に差が見られるかを分析した。中間テストとは漢字・語彙・文法など、総合的なものである。調査の結果、語彙学習では上位群はより広くストラテジーを使用していることが明らかになった。また、上位群と下位群では総合的な勉強時間はほぼ同数であることから、上位群は学習状況をモニターし、学習時間を多岐に分配してよりアクティブに学習しているとも述べている。更に、使用するストラテジーについても一部違いが見られた。

- ①上位群では0%であった「フラッシュカード」は、下位群では60%である。
- ②「お互いにテストをする」は上位群が63%に対し、下位群は0%である。また、「文を作る」は上位群が100%に対して、下位群は20%である。

語彙学習ストラテジーの種類と学習時間については、学習者自身の報告であるため、正確ではない可能性があるものの、日本語のレベルが高い学習者ほど、単に広くストラテジーを使用しているだけではなく、それぞれのストラテジーに対して、計画的に時間を分配しているという点にまで言及した研究は他に見られない。また、日本語のレベルが低い学習者の使用するストラテジーは機械的で、単純なものが多いようである。

于 (2010) の調査は、唯一縦断的研究である。中国の大学において、Oxfordの開発したSILL (Strategy Inventory for Language Learning) を改修した調査用紙を、日本語初級学習者132人に実施し、1年半後同じ対象者に上級レベルに達した段階でも再度実施し、その結果を比較した。それによると、ストラテジー使用率が全体的に上がっているが、使用の傾向に大きな差は見られず、どちらも補償ストラテジーの使用が最も高く、記憶ストラテジーの使用が最も低かった。また、132人の学習者の内、それぞれ日本語能力試験1級の「文字・語彙」「聴解」「読解」「総合」の成績の上位30人を上位群、下位30人を下位群とし、2つの集団に有意な差があるかt検定を用いて分析した。その結果から、よい学習者には以下のような特徴があることを示唆している。

- ①よい学習者は連想や連絡を用いて記憶する。例えば、「発音と漢字の表記を結びつける」「覚える時に頭の中でその情景を思い浮かべたりする」など。
- ②よい学習者は複数のストラテジーを広く用いる。

- ③よい学習者は非言語手段（補償ストラテジー）をよく使用する。

一方、悪い学習者には以下のような特徴がある。

- ①機械的な記憶ストラテジーを好む。
 ②学習の計画（メタ認知ストラテジー）が、実行できない。
 ③よい学習者よりも情意ストラテジーを使用する。悪い学習者は授業中に教師や同級生に対してストレスを感じたり、実際に日本語を使う際はその文化差などにストレスを感じたりして、不安や焦りを感じる傾向が強く、それらを緩和するために情意ストラテジーをよく使用する。

この研究は、同じ対象者に対してストラテジー調査のためのアンケートを初級の段階と上級の段階と2回実施することで、日本語の習熟度によって語彙学習ストラテジーの使用傾向に変化が見られるのかという点を明らかにしようとしている。調査の結果は、使用するストラテジーの内容には変化がないものの、上級になると同じストラテジーを初級段階よりも多く使用することが明らかになっている。また、日本語のレベルによって使用する語彙学習ストラテジーには違いが見られることも明らかになった。それはMoriの指摘と同じく、日本語の総合的な成績が高い学習者は広くストラテジーを使用し、日本語の総合的な成績が低い学習者は機械的で、単純なストラテジーを好む傾向があるという点である。

4.3 母語と語彙学習ストラテジー

中西（2008）は、学習者が語彙や漢字をどのように学習しているのかを調査するために自由記述式のアンケート調査を行った。調査対象は日本の大学で日本語を学ぶ学習者で、漢字圏9名、非漢字圏13名である。特に、漢字圏と非漢字圏の相違について以下の3点が挙げられている。

- ①「何度も書く」ストラテジーを全ての学習者が使用した。特に非漢字圏の学習者は100%の使用だった。
 ②「読む」ストラテジーは漢字圏の学習者のほうがやや多く使用していた。
 ③中国語母語話者は日本と中国の漢字の字形の相違に注意しながら学習している。

この研究から、母語に漢字そのものや、漢字の文化がある学習者と、そうでない学習者とでは、使用する語彙学習ストラテジーが一部異なることが明らかになった。しかし、この研究の問題点は、先行研究で得られたよう

な語彙学習ストラテジーの分類を用いていないが、調査で得られたストラテジーは全てオックスフォードの分類の「直接ストラテジー」であり、その中でも目に見えるものに限定されていることである。学習者の語彙学習ストラテジーの予備知識がないため、自由記述式のアンケート調査では回答が限定的になってしまったのではないかと考えられる。

5. 考察

これまでの日本語学習者を対象にした語彙学習ストラテジーの研究では、先行研究の分類を基にして、数多くある語彙学習ストラテジーのうち、日本語学習者はどのようなストラテジーをよく使用しているのか、語彙知識や日本語の総合的な成績とはどのように関わっているかを明らかにしてきた。これらの研究に共通していたのは、

- ①語彙テストや日本語の総合的なテストの成績がよい学習者は語彙学習ストラテジーを広く使用している。
 ②語彙テストや日本語の総合的なテストの成績がよくない学習者は「繰り返し」などの機械的で単純な語彙学習ストラテジーを好む。成績がいい学習者は「文を作成する」などの複雑な語彙学習ストラテジーも使用する。

という2点である。また、于（2010）の研究からは、日本語が初級であった時点と上級になった時点での語彙学習ストラテジーの使用に大きな変化はなく、上級に達している学習者の中にも語彙学習ストラテジーの使用が限定的な、所謂「悪い学習者」が存在するという点が明らかになっている。このことから、語彙学習ストラテジーのトレーニングの重要性が確認された。しかし、日本語教育では、管見の限り、語彙学習ストラテジーのトレーニングや指導に言及した研究は見られない。

また、トレーニングの計画を立てる場合には、複数ある語彙学習ストラテジーのうち、いずれかのストラテジーに焦点を当てなければならないが、焦点を当てるべきストラテジーは、母語やその他の条件によって異なるようである（中西 2008, 王 2007）。そのため、今後語彙学習ストラテジーのトレーニングの研究を行うにあたっては、これまでの研究を参考にし、まず対象となる学習者の使用する語彙学習ストラテジーの傾向を明らかにする必要があるだろう。

参考文献

- オックスフォード, R 宍戸通庸・伴紀子 (訳) (1994) 『言語学習ストラテジー 外国語教師が知っておかなければならないこと』 凡人社
- (Oxford, R. (1990) *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York, USA: Newbury House)
- 中西泰洋 (2008) 「日本語学習者の漢字・語彙の学習方法について」『神戸大学留学生センター紀要』 14, pp. 21-27
- 日本語教育学会編集 (1982) 『日本語教育事典』 大修館書店
- 橋本ゆかり (2007) 「初級日本語学習者の言語知識の量的側面と語彙学習ストラテジーの関わり—ハンガリーの日本語学習者を対象に—」『ICU日本語教育研究』 4 ,pp.21-36
- 廣森友人, 中島優子, 尾関直子, 大和隆介 (2005) 「指導に用いる代表的なデータ収集方法」『言語学習と学習ストラテジー—自律学習に向けた応用言語学からのアプローチ』 pp.158-175
- 三好裕子 (2005) 「初中級クラスの一事例に見る語彙学習の問題」『早稲田大学日本語教育実践研究』 2, pp.67-76
- 村井潤一郎 (2012) 『Progress&Application 心理学研究法』 サイエンス社
- 横須賀柳子 (1995) 「日本語の語彙における学習ストラテジー」『日本語教育の課題』 pp.219-248,東京堂出版
- 于琰 (2010) 「高级日语学习者的语言学习策略——基于广东外语外贸大学的调查」『日語学習与研究』 2010年第3期総148号 pp.89-93
- 王婉莹 (2007) 「大学专业与非专业学生日语词汇学习策略研究」『日語学習与研究』 2007年第1期総第128号 pp.33-38
- Gu, Y. and Johnson, R. K. (1996) Vocabulary learning strategies and language learning outcomes. *Language Learning*, 46, 4, pp. 643-679
- Mori, S. (2010) Japanese language learning strategies by high and low achievers. 『小出記念日本語教育研究会』 (18) pp.41-61
- Nation, P. (1990) *Teaching and learning vocabulary*. Boston: Heinle and Heinle.
- Nation, P. (2001) *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press
- Sanaoui, R. (1995) Adult learners' approaches to learning vocabulary in second languages. *Modern Language Journal*, 79, 1, pp. 15-28

A review of studies in strategies for learning Japanese vocabulary

Yuko AMANO

How do language students learn vocabulary? It is well known that students use a number of vocabulary learning strategies when studying a second language. Students of the Japanese language also use such strategies and this use has become the topic of several studies. The aim of this paper is to review the studies of vocabulary learning strategies used by learners of Japanese and study the issue. We discuss taxonomy of second language vocabulary learning strategies in the second section, the methods of data collection for strategies in the third section, then we review previous studies of vocabulary learning strategies of Japanese language in the fourth section, and finally in the fifth section we conclude our discussion. Previous studies focused on the way students use learning strategies and they revealed a relation between the use of vocabulary learning strategies and learners' vocabulary knowledge, proficiency levels and their, first language. Several studies reveal that (1) good learners use a variety of vocabulary learning strategies and do it more often than bad learners;, (2) poor learners tend to use mechanical and simple strategies. In addition, Yu (2010) points out that learners tend not to change the way they use strategies, even at an advanced level, and suggests that training strategy use is meaningful for poor learners. We point out two problems of previous studies: (1) most studies have focused on students living in Japan, and research concerning students who learn Japanese in their home countries is not sufficient, (2) no studies have been conducted on training or teaching-vocabulary learning strategies.